

連載コラム



みずき野と その周辺の 植物と昆虫

第 56 回 ハナミズキの咲く頃



もとよし ふさお
本吉 総男

2020 年 4 月

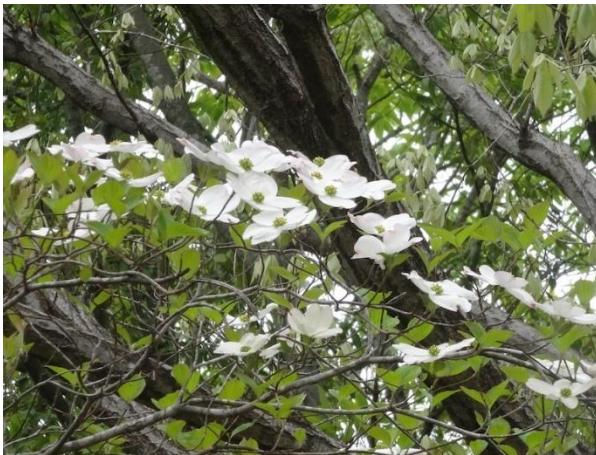
ハナミズキはみずき野のシンボルの花と思っています。公式にそう決められているのではなさそうですが。さくらの杜公園をはじめ、町内を美しく彩っていたサクラが終わり、代わってハナミズキが咲き誇っています。さくらの杜公園を代表する花がサクラなら、中央公園を代表する花はハナミズキ。白やピンクや紅色の花が目を楽しませてくれます。

1 ハナミズキの花

ハナミズキは、ヤマボウシに近縁のミズキ科の植物で、別名をアメリカヤマボウシといいます。ハナミズキの故郷は、別名が示すように北米です。英語名はフラワリング・ダグウッド (flowering dogwood)。みずき野町内には、ハナミズキは中央公園だけでなく、家庭の庭、街角、遊歩道に沿った植え込みにもたくさん植えられています。白花が主ですが、ピンク、ベージュ、紅色の花もあります。



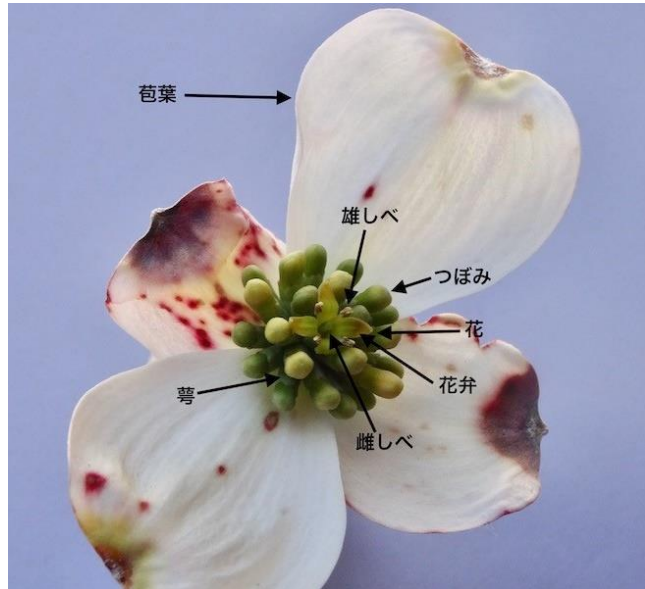
街角のハナミズキ
4月下旬 みずき野6丁目



みずき野中央公園のハナミズキ 4月下旬

ハナミズキの日本へ渡来について、週刊朝日百科「世界の植物」27号には、次のように述べられています。「明治42年(1909)から数年にわたって、当時の東京市長であった尾崎行雄がアメリカ合衆国にサクラの苗木を贈った。その返礼として大正4年(1915)、同国から東京市に贈られたのが日本におけるハナミズキのはじまりで、いわば日米親善の木として有名になった。当初は日比谷公園に植えられ、現在でもその原木が残っている。(以下略)」。由緒ある花木だったのですね。

ハナミズキの花の構造について説明します。花弁のように見えるのは花弁ではなく、^{ほうよう}苞葉(葉が変形したもので、花の^{つぼみ}蕾を保護している)です。苞葉は4枚で、中央の丸く見えるものが花の集まり(植物学では^{かじょ}花序という)です。ひとつ一つの花には4枚の^{がく}萼、4枚の花弁、4本の雄しべ、1本の雌しべがあります。



ハナミズキの^{ほうよう}苞葉と^{かじょ}花序
4月中旬 庭のハナミズキから採取

右上の写真はまだ若いハナミズキの^{かじょ}花序です。花序にはたくさんの花の^{つぼみ}つぼみが見られます。花が1つだけ開花しているため、上に述べた花の構造が具体的にわかると思います。

2 ハナミズキの季節の木の花

この季節はフジの花が真っ盛りです。中央公園では、藤棚の白いフジの花が満開で、ハナミズキと美を競っています。また、あんず公園の藤棚には薄紫の、さくらんぼ公園の藤棚にはピンクのフジが花盛りです。



中央公園



あんず公園



さくらんぼ公園

みずき野の公園の藤棚 4月下旬

みずき野ではハナミズキの季節は、ツツジ(クルメツツジ、ヒラドツツジ、ドウダンツツジ)の季節でもあります。

ツツジは漢字で「躑躅」と書きます。古い漢語で漢音は「テキチョク」。シナレンゲツツジようてきちよくを羊躑躅てきちよくといい、躑躅には「ためらって前に進めない」の意があります。羊躑躅ようてきちよくは生薬に用いられたものを羊が誤飲して死んだという故事から来ているそうです。また、シナヤマツツジこうてきちよくを紅躑躅てきちよくと呼び、単に躑躅と呼ぶこともあるそうです。日本語では「躑躅」をツツジと読ませていますが、中国名の「躑躅」に当てたものです(加納喜光著『植物の漢字語源辞典』東京堂から引用)。

クルメツツジほうようはハナミズキの苞葉が開きかけた頃、満開になります。クルメツツジは、江戸時代から福岡県の久留米市付近で品種改良によってつくられた園芸品種です。九州の山地に自生する野生種、サタツツジ、ヤマツツジ、ミヤマキリシマなどから交配によってつくられたもので、様々な品種がありますが、それらを合わせてクルメツツジと総称しています(週刊朝日百科「世界の植物」22号などより引用)。



クルメツツジ 4月中旬 みずき野7丁目

クルメツツジに続いてヒラドツツジが満開になります。この時期はハナミズキの満開の時期と重なります。ヒラドツツジは長崎県平戸あたりで育成されたツツジの総称です。ケラマツツジ、リュウキュウツツジなどから交配によって、種々のヒラドツツジの品種がつけられました。早くから普及しているオオムラサキ(下の左の写真)もヒラドツツジの品種のひとつとされています(週刊朝日百科「世界の植物」22号などより引用)。



ヒラドツツジ 5月上旬 みずき野5丁目

ドウダンツツジは庭木として栽培されていますが、野生種から選抜された優良品種が使われています。ドウダンツツジの漢字は「灯台躑躅」ですが、灯台をなぜ「どうだん」と読むのかわかりません。また、なぜ灯台なのかもはっきりしません。週刊朝日百科「世界の植物」22号には「昔、宮中の夜間行事のときなどに用いられた結び灯台の脚に似ているところから、灯台ツツジの名ができたものと説明されている」と書かれていますが、結び灯台の脚がどのようなものか、私にはわかりません。ドウダンツツジはみずき野町内の歩道沿いの植え込みに使われています。

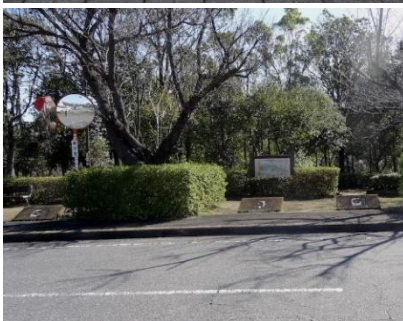


ドウダンツツジ 4月下旬 みずき野5丁目

3 ハナミズキなどの花のタイル

趣向を変えて、みずき野町内の歩道や公園の入り口近くに埋め込まれた花のタイルについて述べることにします。タイルにデザインされた花はハナミズキが一番多いのです。そこで今回のタイトルに合わせて、撮影したタイルの写真を載せることを思いつきました。

最初にタイルが埋め込まれている場所のいくつかを写真で示します。どのあたりか当ててみてください。タイルはハナミズキのほか、ヤマユリやサクラ、その他をモチーフにしたものもあります。



タイルのある場所の一部
もっとあるので、散歩がてら探してみてください。
ハナミズキのほか、ヤマユリ、サクラ、その他が
デザインされています。

次に、いくつかのタイルの写真を載せましょう。

タイルはみずき野造成開始後、いつ頃はめ込まれたのか推測できませんが、かなり古いもののように思えます。描かれている花は色のついた細かい石を固めたように見えます。はめ込まれた当時は色鮮やかなものだったかと想像しますが、記憶にありません。今では、ひびが入ったり、かけたり、泥やほこりがついたり、地衣ちいが生えたりして、変貌はなほだしいものですが、それはそれで渋い美しさを感じます。



ハナミズキのタイルの一部



ヤマユリとサクラのタイル



みずき野どんぐり公園の入口にもハナミズキのタイル

なお、どんぐり公園の入り口のタイルは人が踏まないせいか、ダイダイゴケちい（地衣の一種）がたくさん生えていました。この地衣は乾いていると橙色ですが、雨に濡れると緑色に見えます。雨か晴れかによって、タイルに描かれたハナミズキの雰囲気も変わります。

（注）雨に濡れたこの地衣ちいから推測すると、リンク先の画像の[ツブダイダイゴケ](#)によく似ています。



晴天の日に写したもの。右は花の中心の拡大図。
付着している地衣が橙色に見える。



雨の日の翌朝に写したもの。右は花の中心の拡大図。
付着している地衣が緑色に見える。

一方、大村嘉人著『街中の地衣類ハンドブック』（文一総合出版）によれば、ツブダイダイゴケではなく、コウロコダイダイゴケのようにも思われます。この地衣はみずき野の街なかのコンクリートの上の至るところに生えています。

あちこちに散在するタイルの場所を調べると、タイルがかけてなくなってしまったところもあり、これからもだんだん破損していくと思います。でもこれらもみずき野の文化財と私は思っています。どれも大切に保存したいものです。